

多面的・多角的に考察する子どもの育成 —小学校社会科第5学年農業に福祉の視点を入れた単元の開発—

箕浦 彬人* 真島 聖子**

*附属岡崎小学校

**社会科教育講座

Nurturing children who consider things from multiple perspectives and angles – Development of a unit that incorporates a welfare perspective into agriculture in the 5th grade of elementary school social studies –

Akito MINOURA* and Kiyoko MAJIMA**

*Okazaki Elementary School Affiliated to Aichi University of Education, Okazaki 444-0072, Japan

**Department of Social Studies Education, Aichi University of Education, Kariya, Aichi, 448-8542, Japan

Keywords：多面的 多角的 農福連携 社会科

I 研究の目的

本研究の目的は、人々の営みの背景について多面的・多角的に考察することができる子どもの育成を抽出児童の変容を通じて明らかにすることである。小学校第5学年の社会科授業では、身のまわりの人と支え合いながら、よりよい生活や社会を形成していこうとする子どもを育成したいと考えた。この姿は人々の営みの背景に迫っていくなかで、人々の営みと、自分の生活とのつながりを意識することで表れるのではないかと仮説を立てた。そこで、本研究では、求める子どもの姿を「人々の営みの背景について多面的・多角的に考察することができる子ども」と設定した。本研究では、以下の用語を次のように定義する。

○【人々の営みの背景】

人々の営みの意義や込められた思い、社会的事象を、本研究では「人々の営み」とする。

○【多面的・多角的に考察】

自分や仲間がつかんだ事実をもとに、農業・福祉・経済などの側面から考察したり、様々な立場や役割から考察したりすること。

II 研究の方法

本研究では、生活に生きてはたらく力を養うため、子どもが自ら問題を見だし解決していく問題解決学習を展開する。子どもたちは、ひとり調べをし、子どもなりの方法で追究を深めていく。本研究では、問題解決学習の過程で、子どもをとらえ、そのとらえに応じて、以下の4点を中心に教師支援を講じる。

(1) 朱記と対話を行う

教師支援の1つ目は、朱記と対話によって、子どもの追究を支えることである。子どもの蓄積されたひとり調べのノートや、振り返りに朱書きをする。子どもの追究に必要な投げかけや励ましをすることで、子どもの気づきを意識づけたり、その後のひとり調べを方向づけたりする。また、教師と子どもとの対話によって、教師は子どもの考えを認めたり、甘さを指摘したりする。そのなかで、子どもの考えを整理したり、真意を探ったりする。

(2) かかわり合いを設定する

教師支援の2つ目は、子どもがひとり調べで得た事実や考えを学級全体で出し合い、吟味するかかわり合いを設定することである。かかわり合いを通して、自分の追究のよさや

足りなさに気づき、追究の見通しをもったり、新たな視点を得て追究を深めたりする。

(3) 見学やインタビューの機会を設定する

教師支援の3つ目は、見学やインタビューなど、自分なりの方法で子どもが追究の対象となる人に繰り返しかわることができる場を設定することである。追究の対象となる人に繰り返しかわることで、人々の営みの背景について、事実をつかむことができる。

(4) 仲間と意見交流する時間を設定する

教師支援の4つ目は、ひとり調べにおいて、自分の追究に満足したり、仲間の考えが気になったりしたときに、仲間がつかんできた事実や、仲間の考えをまとめた冊子を配付した後、話を詳しく聞きたい仲間と自由に意見交流する時間を設定することである。仲間と意見交流することで、自分がつかんだ事実や考えのよさに気づくことができ、仲間の考えを取り入れることで、人々の営みの背景について、多面的・多角的に考察することができる。

Ⅲ 単元の構想

1 陽志⁽¹⁾をとらえ、願いをかける

本研究の対象クラスの児童は、どのような授業においても、挙手をして自分の考えについて根拠をもとに伝えることができる。本研究の抽出児童である陽志は、自分が発言するだけでなく、仲間の発言に対しつぶやいたり反応したりする姿がよく見られる。発言内容に目を向けると、端的に自分の考えを伝えるのではなく、長い時間をかけて言いたいことを遠回しに伝えることが多々ある。また、語尾には「多分」、「知らないけど」という一言が添えられていることが多い。陽志の生活日記を読み返してみると、よく出てくる言葉がある。それは、「大変」、「つらい」、「めんどくさい」である。そして、それらの言葉が使っているのは大抵、塾のあった日が多い。塾に通っていることが、陽志の負担になっているのだろうか。

今日は、プールがありました。久しぶりのプールだったのですごく楽しかったです。明日は、音楽集会です。やっぱりトップバッターはつらいです。 (6月14日 陽志の生活日記)

音楽集会の前日、めずらしく塾以外の内容の際に、「つらい」と記されていたので、気になって陽志に「どうして辛いのか」と、声をかけてみた。すると、「どんな感じかわからない」と答えが返ってきた。陽志は、結果がどうなるかわからない、または、見通しをもつことができないものに対して不安を抱くのであろうか。陽志が不安を感じるのは、塾のテストに起因しているのではないだろうか。塾の日記の際に用いられる「大変」、「つらい」、「めんどくさい」という言葉は、勉強しても結果がどうなるかわからない、それらの不安から来ているのではないだろうか。

運動会の三色リレーの代表選手を決める際、最後の一人が陽志と涼季にどちらにするか決まらなかった。代表選手なので、走って決めようと提案するが、「めんどくさいからじゃんけんがいい」とじゃんけんで決めることを最後まで主張していた。 (5月2日 教師メモ)

5年生になってから「めんどくさい」ってすごく言うようになりました。塾で順位順に座席が決まるんですけど、それで失敗してからすごい言うようになりました。

(7月14日 個別懇談会の母親の話)

運動会の際に、最後までじゃんけんを主張していた姿も、失敗することへの不安から来ているものであると考えた。これらのことから、陽志にとって必要なのは、ひとり調べの際に、追究の見通しをもつことができるための教師支援であり、そのなかでわかった、事実を得たという成功体験を積み重ねていくことではないかと考えた。陽志の日記には、仲間とのかかわりがあまり出てこない。しかし、数少ないが、仲間の名前が出てくるのは決まって何かを成し遂げたときである。生活日

委員会で何回か発言できたのでうれしかったです。体育で力・力・力をやりました。ひでくんといっしょに楽しくやれたし、全部できたので、これから一緒に楽しく心を合わせてやりたいです。 (5月9日 陽志の生活日記)

記からも「全部できた」と、仲間とともに何かを成し遂げることに価値を感じていることがわかる。

T 18 陽志さんは、どうして友だちが大切だと思ったの？
陽志19 僕は、後々のこと？何か困ったときに、助けてくれるっていうか。何か自分が困ったときに何とかしてくれる？助けてくれるのは友だちだと思うから。
(6月23日 スピーチの記録)

また、「困ったときに、助けてくれる」存在だとも考えていることがうかがえる。見通しのないことや、失敗を極端に嫌う陽志だからこそ、成功することに対する価値をより感じているのではないだろうか。また、その成功体験と一緒に味わったり、助けてくれたりするところに仲間の価値を感じているのではないだろうか。

そんな陽志だからこそ、追究の際に、追究が停滞したり、困難に立ち止まったりした際には、仲間と考えを伝え合ったり、仲間と共に困難を乗り越えることができれば、自信をもつことができるのではないだろうか。

陽志は、社会科の授業に主体的に取り組むことができる。1学期に行った岡崎魚市場を取り扱った単元の授業記録を見返してみると、「多分、知らんけど」を用いているときは、その発言の根拠がタブレットによるひとり調べやニュースなどで得た知識をよりどこに置いたものであることが見えてきた。陽志は、直接足を運び、実際に見たり、人から聞いたものを大切にしているのではないだろうか。岡崎魚市場に見学に行った際には、質問の時間だけでは聞けなかったことを、案内してくれた社長さんに時間をかけて聞いている陽志の姿があった。また、休日に直接魚屋に行きインタビューするなど、陽志の追究は、人から直接話を聞くことが中心であった。「どうして岡崎魚市場が130年間も続いているのか」社長さんに何度も繰り返し、インタビューすることでその背景に迫っていった。単元最後のかかわり合いでは、自身の成長を

「浅岡（社長）さん、岡崎魚市場に行って」「興味をもった」と、直接見たり、聞いたりしたからこそ、意欲的に追究することへとつながったと述べている。直接、見聞きしたものを大切にする陽志だからこそ、さらに、数値データや社会的事象の背景にかかわる資料などから、自分なりに解釈していく力を伸ばしていけば、聞いてわかったこととともに整理し、さらに多面的・多角的に考察する力が伸びるのではないかと考えた。

○【陽志への願い】

- ・自身の追究に見通しをもち、自信をもって追究を進めていってほしい。
- ・仲間とのかかわりのなかで、成功体験を積み重ね、自分の追究や考えに自信をもってほしい。
- ・問題解決に向けて、より多くの事実をもとに、様々な側面や視点から社会的事象を見つめ、その背景を多面的・多角的に考察できるようにしてほしい。

2 教材を選定する

本研究では、子どもたちへの願いを具現化するため、「農福連携を進める小野彰之さん」を教材に選定した。本教材には以下の3点について教材性があると考えた。

第1に、多角的に考察できる点である。どうして小野さんが農福連携を進めるのか、小野さんを通して考えることで、障がい者や、農家や事業所など、多くの人の未来を考えて活動していること、農業と福祉の架け橋になることで、誰もが笑顔になってほしいと考えていることなど、小野さんがどうして農福連携を行うかについて、多角的に考察できる。

第2に、子どもから問いを生み出し追究できる点である。小野さんが一人で畑を管理するのは大変であるという意識と、障がい者が作業を行うのは時間がかかるという意識をかかわらせるなかで、「どうして小野さんは、新たに農業を始めたのかな」という問いをもち、小野さんの活動について追究できる。

第3に、多面的に考察できる点である。小野さんが農業を始めた理由について追究するなかで、様々な理由や思いによって、小野さんが農業をすることに決めた理由や岡崎市の農業を取り巻く現状や障がい者の雇用の厳しさにも気づく。小野さんの活動に価値を感じる意識と小野さんの活動は本当に障がいの者のためになるのかという意識をかかわらせることで「どうして小野さんは農福連携を行っているのか」「事業所の人や農家の人、障がい者の家族はどう思っているのか」と新たな視点を持ち、農業・福祉・経済など、多面的に追究に向かうことができる。

IV 追究の実際と考察

1 問題意識をもつ場面

① 自分たちで農作物を作る子どもたち

本単元の導入では、農家の人の畑を作る大変さや、休みなく作業をする必要性を実感させたいと考えた。そこで「自分たちで野菜を育てよう」と課題を与え、自分たちが育てたい野菜を決め、そのために何が必要か、どのような手順を踏まなければいけないかなど、自分たちで調べて活動した。子どもたちは、自分たちの農園を『5-2農園』と名づけ、作業を進めた。陽志は、大根を育てることに決め、毎日欠かさず畑に行き、作業をしていた。また、毎日の大根の変化を教師に逐一報告してくるなど、愛着をもって育てていた。

② A農場を見学する子どもたち

農業も機械化が進んでいるなかで、小野さんが農業を手作業で進めることに驚きや疑問を感じさせたいと考えた。そこで、子どもたちの身の回りの経済活動は、機械化や自動化が進んでいるという意識をほりおこしたいと考え、子どもたちから出た「岡崎市のA農場（仮名）でAIの技術が使われている」という発言を取りあげ、実際に見学しに行くことになった。A農場の見学では、どのように農作物を作っているのか、大型機械やドローン

を見ながら、その過程を説明していただいた。

見学後のかかわり合いでは、気づいたことや思ったことを発表し合った。子どもたちは「土地が東京ドーム85個分と聞いて驚いた」「ドローンが自動操縦で機械化になっている」など、規模の大きさや機械化の進歩に驚いていた。陽志は「普段から味噌や醤油をA農場で買っている。おいしいからわざわざ買っている」と、自身の経験を伝えていた。

③ 野菜の食べ比べをする子どもたち

小野さんに出会わせる前に、子どもたちから小野さんに会ってみたい、小野さんの農園に行ってみたいと思わせたいと考えた。そこで、どのように育てられているかを伏せて、スーパーで売られている慣行栽培のピーマンと小野さんが経営するおのの農園で作っている自然栽培のピーマンの食べ比べを行った。陽志は「B（自然栽培）の方が色が濃い」「Bの方が苦い」など、様々な気づきをメモしていた。その後、2つの野菜を食べ比べて気づいたことや思ったことを発表し合った。陽志の「Bの方は2個食べたけどめっちゃ苦かった」美空や優奈の「Bの方は甘かった」という気づきの違いをきっかけに、賢太は「Aはみんな同じだから機械で、Bは手作業かな」と発言した。すると、学級全体から味の感じ方がばらばらだったBのピーマンの作り方がわからない、作り方を知りたいという声があがったので、Bのピーマンをどのような方法で作っているのか見学することになった。

④ おのの農園を見学する子どもたち

おのの農園の見学では、自然栽培でどのように育てているか、小野さんから説明を受けた。また、手作業の大変さを実感したり、自分たちの農園と比較したりできるように、農作業を体験した。また、障がい者の方々と作業を行っている様子を見させたいと考え、同じ作業を事業所の方にしていただいた。

陽志は、見学メモに「6000個しかできない（にんにくが）」「土地が大きくないので、そ

れで成り立っているのか心配」と記していた。A農場と比較し、経営や収益という経済の視点からおのの農園を考えていることがうかがえた。見学後「自然栽培と言っていたが、全ての野菜かはわからない」、「どうして障がい者の方と作業をしているのか」などの声があったので、自分たちがわからない点について小野さんに話していただくこととした。

⑤ 小野彰之さんに話を聞く子どもたち

小野さんを学校に招き、今までの経歴を中心に、自然栽培の方法やどうして障がい者を雇用しているのかなどを話していただいた。

陽志は、小野さんの活動について「感心」としながらも、「意味がわからないし、理解できない」と年収の視点から仕事を辞めて農

おのの農園を作った理由が全部障害者のために障害者のために年収1000万円の会社をやめるという行動にしたと聞いて本当にすごい人だなと感心した。(10月18日 陽志の学習記録)

T どんなところに感心したの？

陽志 いや、感心したっていうか。

T 何？何かあるの？

陽志 意味がわからないし、理解できない。

T 何が理解できないの？

陽志 だってさ、前の企業Bだけ？ある程度の年収と地位があったわけでしょ。でも、それを捨てていきなり関係のない農業にいく意味がわからない。

T その部分が納得できないんだね。

(10月19日 陽志との対話記録)

業を始める決心した小野さんの行動について疑問をもっているようであった。

子どもたちは、おのの農園の見学や小野さんの話を聞き、小野さんが一人で農業を行うことは大変であるという気づきや障がい者が作業をするのは時間がかかるという気づきをもっていた。これらの気づきをかかわらせることで、一人一人がもつ問題意識がはっきりし、追究の見通しがもてると考え、問いを生むかわり合いを設定した。

実際の授業では、賢太の畑を一人で管理するのは大変という気づきと涼太の障がい者と活動するのは時間がかかるという気づきをかかわらせていった。陽志も「年収がそれだけ

あったら不自由なく子どもも暮らせるのに、何で前の仕事をやめたのかがわからない」と発言した。

みんな話を聞いても、やっぱり全部わからなかった。子ども→障がい者→地域の人になったということもわからない。

(10月27日 陽志の学習記録)

収入のことが解決すれば納得するのかな？

陽志は「やっぱり全部わからなかった」と、仲間の考えを聞いても小野さんの行動を理解できないようであった。そこで、陽志が見通しをもって追究をすることができるように、陽志がこだわりをもっている収入面を大切にすることができるよう朱記を行った。

2 追究を見直す場面

① それぞれの方法でひとり調べをする子どもたち

「どうして小野さんは、新たな仕事に農業を選んだのかな」という問いをもった子どもたちは、それぞれの方法でひとり調べを行った。また、それぞれの子どもたちが、何を疑問に思っているのか、何を知りたいのか、また、追究の甘さを指摘することができるように、常に対話を行うようにした。

陽志は、小野さんに繰り返しインタビューすることで、「自然栽培は手作業のため大変だけど、おいしい野菜ができる」「家族の支えがあって農業に変える決断をした」などの事実をつかんでいった。

また、小野さんだけでなく、そのような事例が他にもあるのか確かめるために、小野さんと同じ自然栽培パーティに所属している他の農家へのインタビューも行った。そして、「自然栽培は値段が高いこと」「自然栽培は効率よくやれば簡単に収益が出やすいこと」などの事実もつかんでいった。陽志は「農業は

東海理化をやめるのは両親はOKしたが、妻は2000万ためたらOKと言った。1年で400万でも5年もつ。農業は簡単なので、障害者でも子どもでも高齢者でもできる。

(10月27日 陽志の学習記録)

子ども→障がい者→地域のつながりは納得したのかな？

簡単」と学習記録に書いていた。そこで、その真意を探るために対話を行った。

T	自然栽培は大変って言ってなかった？
陽志	大変なんだけど、一つ一つの作業は簡単だから。
T	自然栽培じゃなくてもいいってこと？
陽志	いや、それは違う。 <u>農薬を使っていないから安心だし、おいしいから。</u>
T	それって、小野さんからだけの話？
陽志	いや、ちからさんも言ってた。
T	なるほど、他の農家さんも言ってたんだ。
陽志	それで自然栽培に決めたんだね。
陽志	そう。それで、書いてあったけど(朱記)子どもが将来を考えて障がい者のことを知ってもらうために地域の人と活動している。
T	そうなんだ。息子さんのためだけに農業を始めたってこと？
陽志	1番の理由はそれで、 <u>地域の人のことや未来も考えている。</u>
T	子どものことを考えて始めただけで、地域の人のことも考えているんだね。

(10月29日 陽志との対話記録)

対話のなかで、「大変だけど、農業の一つ一つの作業は簡単」「(自然栽培は)農薬を使っていないから安心だし、おいしい」と考えていることがわかった。また、陽志は、小野さんだけでなく、他の農家からも自然栽培のよさを聞いたことから、自分の追究に自信をもっている。また、こだわっていた収入面の疑問も「2000万円貯金したら農業をする約束を家族とした」、「毎年売り上げが上がっているし自然栽培は売れるから大丈夫」と、小野さんの現在の資金と、今後の収益予測から、納得している様子であった。

しかし、このままだと、陽志は安易に満足し、追究が停滞してしまうと考えた。そこで、陽志の「地域の人のことや未来も考えている」という発言に注目した。収入面の疑問を小野さんや他の農家さんにインタビューすることで事実をつかんだ陽志が、福祉の視点にも目が向きかけていると考えたのである。そこで、追究を見直すかわり合いのなかで、小野さんが障がい者に払う給料に疑問を感じている涼太の考えに焦点化すれば、篤呂がこだわっている収入の視点を大切にしながら、福祉の

視点からも追究をしていくのではないかと考えた。

② 追究を見直すかわり合いをする子どもたち

陽志109 僕は、最初小野さんに話を聞いたときに、ほとんど何も理解できなかったんだけど、－〈略〉－家族がOKした理由は、2000万円を貯金を作ってから辞めて、年400万だったとしても5年はもつから、それで貯金をして－〈略〉－地域の人と触れ合うことで、世の中には障がい者がいるんだって言って、自分の息子が社会に出たときにあまりいじめられないようにするためっていうことがわかった。

－〈略〉－

涼太125 愛知県のアルバイトの最低賃金が1027円。差が860円なんだけど、それを知って、小野さんは障がい者のためにお仕事をあげたりしてるって思ったんだけど、その障がい者のためにやっているわりには、少し安いかなって思いました。

T 126 これが安いってことね。おのの農園の時給は決まっているの？小野さんが決めているの？

涼太127 うん。それは小野さんが経営してるから、小野さんがそのお金を渡す量を決めてる。障がい者のためなら、もっとあげればいいのにな。だけど、小野さんの年収が30万円って言ってて、過酷なお金の中でやってるから、なのにたくさんあげたらやばいから、だから低いのかなって。

T 128 なるほど。みんなはどう？167円っていう金額は？

C 129 安いと思う。

－〈略〉－

陽志181 でも、障がい者だもんで、もともと小野さんにやらせてもらえなければ、障がい者はその施設にいるから、その施設からアルバイトに行こうと思えば行けるんだけど、行けないから小野さんの施設にいるわけだから、お金がないよりはいいんじゃないかなと思います。

(11月17日 追究を見直すかわり合い授業記録)

陽志109 「世の中には障がい者がいるんだって」と、小野さんの子どもに障がいがあることをきっかけに農業を始め、そのことが障がい者のためになっていると考えを伝えた。学級全体が、小野さんの活動に価値を感じ始めているところで、涼太125「障がい者のためにやっているわりには、少し安い」と、小野さんが障がい者に支給している工賃（給料

のこと)が安いと考えている涼太を指名した。子どもたちからは「社会に出る練習だから安い」、「お金目的じゃない」、「収入が少ないから払えない」などの予想や考えが出てきた。陽志は、陽志181「お金がないよりかはいい」と自分の考えを伝えていた。

陽志の学習記録には「しせつにいただけ」、「バイトに行くはず」など、調べてつかんだ事実と予想が混在していた。また、「お金めあてではない」と、授業から一貫して自分の考えを貫いている様子だった。陽志の考えの真意を探るために対話を行うことにした。

- T 障がい者の方々は、施設にいただけなの？
 陽志 それはわからない。多分。
 T ここは予想ってこと？
 陽志 そう。
 T じゃあ、ここは調べる必要があるね。障がい者はバイトに行ってるの？
 陽志 行けると思う。ネットに仕事とか書いてあった。
 T バイトには行けるけど、実際のところはまだわからないんだね。どこまでがネットで調べたことなの？
 陽志 障がい者が仕事できるかとか、バイトできるかとか、どれだけ施設に入るのにお金がいるのかとか。
 T そのへんはデータを集めたんだね。すごいじゃん。なんで、お金目当てではないと思ったの？授業中も言ってたけど。
 陽志 前に小野さんがやりがいって言ってた。
 T どういうこと？言ってたっけ？
 陽志 言ってた気がする。色々な仕事をやってもらって、自分に合った仕事とか特技を見つけてもらって、外に出ると気持ちいいんだって。
 T 農業のこと？
 陽志 そう。外に出てみんなで体を動かして、やりがいのためにやってるって。
 T よく聞いてたね。それって、小野さんが言ってた？事業所の人？
 陽志 事業所の人には聞いてない。
 T 事業所の人に聞けばもっとやりがいが見えてくるのかな？
 陽志 そうかもしれない。

(11月21日 陽志との対話記録)

陽志と対話を行うことで、何が事実で何が予想なのかを整理することができた。また、「やりがいのためにやってる」と、農福連携の価値に気づき始めていることがうかがえた。陽志は、追究当初は「年収や地位を捨てる意

味がわからない」という思いをもっていた。しかし、収益にこだわって追究をしていた陽志が、「お金目当てではない」、「やりがいのために」と、小野さんや他の農家の思いの触れ、お金だけではない価値に多面的・多角的に考察し始めていると考えた。

3 核心に迫る子どもたち

陽志は、小野さんが言っていたやりがいとは何かを確かめるために、再び追究を進めていった。陽志は、インターネットを用いて障がいの重さの違いやそれによる生活の違い、障がい者施設に入るためにはどのような資格がいるのかなど、データを集めていった。また、福祉事業所へのインタビューを行い、障がい者の生活の実態、障がい者や事業所の人たちは、農福連携や農家とともに農業を行うことをどう思っているのかを質問していた。

そして、「障がい者の人たちは楽しみながら仕事をしている」、「生き生きとした顔で作業をしている」という事実をつかんでいた。また、子どもたちから「仲間が調べた事実を知りたい」、「比較したい」という声が挙がったので、仲間がつかんできた事実や、仲間の考えをまとめた冊子を配付した。その後、話を詳しく聞きたい仲間と自由に意見交流する時間を設定した。陽志は「やりがい」について調べている仲間を探し、陽志とは別の事業所にインタビューした咲弥に「どのようなところがやりがいと言っていた？」と、意見交流を行っていた。そして、陽志は「農業をして顔つきが変わった」、「お金をもらえるという経験が働くという練習になる」とやりがいにつながる事実をつかんでいた。

障がい者は作業することを楽しみにしているから、給料の問題ではないと思った。障がい者は楽しい、農家ははかどるで、どちらにとってもいいと思う。小野さんは、子どもの未来のためにやっている。(12月8日 陽志の学習記録)

陽志は、これらの事実から「給料の問題ではない」、「子どもの未来のためにやっている」と、小野さんがどうして農福連携を進め

ているのか、小野さんや農家に聞いたこと、集めたデータをもとに多面的に考察し、自分なりの結論を学習記録に書いていた。

他の子どもたちも、小野さんの農福連携について自分なりの考えがまとまってきた様子が見られたので、核心に迫るかかわり合いを設定した。

- 陽志56 子どものためを始めとして、それがどんどん広がっていった。
- C 57 他の障がい者とかとつながっていった。
- 陽志58 子どものためでスタートして、そこで小野さんの子どもがそこで生きていけるように、色々なために、子どものためだけど、みんなのためでもある。
- 〈略〉—
- 優花72 いや、違くはないんだよ。だから、子どもと将来一緒にやりたいなっていう思いから農業になって、子どもが将来一緒にできるように農業を選んで、農福連携を取り組んで、最終的には子どものためになるけど、それがどんどん広がっていったから、子どもが1番だとしてもそれがどんどん広がっているから、障がい者とか。だから、子どものことを考えて始めたけど、それが違う人たちに広がっていった。
- 〈略〉—
- T 135 ずっとつながったとか、広がっていったって言うけど、自然に広がっていったの？
- 花音136 障がい者と一緒に仕事して、農家の人も障がい者の人も優しくなって、それで広がっていったと思う。
- 美空137 みんな小野さんの活動に共感して、それで広がって笑顔になっていったんじゃないかな。—〈略〉—
- 陽志141 自分は人柄かな。そこに惹かれて。
- T 142 どういう人柄？
- 陽志143 みんな平等に見てるっていうか、大人だからとかなく、障がい者も子どももみんな一緒っていうか。だから信頼していったんじゃないかな。
- (12月12日核心に迫るかかわり合い授業記録)

陽志は、小野さんが農福連携を行う理由を、陽志56「子どものため」としながらも、陽志58「色々なために」と多角的に考えていることがわかる。また、実際の授業では、小野さんの思いの背景に迫るために、優花72「違う人たちに広がっていった」に焦点化した。そして、花音136「優しくて」、美空137「笑顔になって」など、それぞれが多角的に考察し、

自分なりの言葉で小野さんの思いの背景を伝えていった。陽志は、陽志143「みんな平等」、「信頼していった」と自分の考えを伝えていた。また、学習記録にも「信頼できるとみんなが思った」と小野さんの農福連携に込められた思いが周りの人に伝わり、お互いが信頼し合うことで広がっていったと、自分なりの言葉で記していた。その後の対話では、「信頼関係が大切で、それでみんながつながっている」と、自身が追究してきたことをもとに語っていた。

V 成果と課題

本研究の成果は、主に3点挙げられる。第1に、見通しがもてないことに對し、自信をもてなかった陽志が、自分の追究の方向性や考えを整理することで、見通しをもち、自信をもって追究を進めることができたことである。第2に、小野さんに繰り返しインタビューを行ったり、農家や事業所にインタビューしたりすることで、確実に事実をつかみ、自分の追究や考えに自信をもつことができたことである。第3に、小野さんがどうして農福連携を行うのか、自分がインタビューでつかんだ事実、インターネットから集めたデータ、仲間とのかかわり合いや意見交流から得た事実など、多くの事実をもとに、小野さんの思いの背景について多面的・多角的に考察することができたことである。

本研究の課題は、農業に福祉という視点を入れた単元構想を開発したことで、多面的・多角的に考察することができた一方で、視点が多岐に渡りすぎるため、自分の考えを整理するのに時間がかかってしまったことである。小学校5年生の段階で、どこまで教材を多面的に追究し、どこまで多角的に考察するべきか、今後の研究の課題にしていきたい。

注

- (1) 本稿における子どもの名前は、すべて仮名である。